

氏 名 (本 籍)	な す あき お 那 須 昭 夫 (長 野 県)
学 位 の 種 類	博 士 (言 語 学)
学 位 記 番 号	博 乙 第 1854 号
学位授与年月日	平成 14 年 7 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	日本語オノマトベの語形成と韻律構造
主 査	筑波大学教授 博士 (文学) 湯 沢 質 幸
副 査	筑波大学教授 高 田 誠
副 査	筑波大学教授 博士 (言語学) 坪 井 美 樹
副 査	筑波大学教授 博士 (文学) 山 田 宣 夫
副 査	筑波大学助教授 P h . D . 竹 沢 幸 一

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、韻律形態論の枠組みに基づいて、日本語オノマトベの語形成と韻律構造の関わりあいを明らかにしようとするものである。

日本語オノマトベの音韻構造については、従来多く、音と意味の関係を明らかにしようとする音象徴論の視点から研究が行われてきた。そして、その大半は分節構造を対象とするものであった。このような現状を踏まえて、本論文は、これまでさほど注目されてこなかった韻律的側面に焦点を当て、日本語オノマトベの語構成を韻律構造との関わりにおいて分析しようとしている。

本論文の主眼及び主張は次の二点にある。

第一は、オノマトベの形態に含まれる韻律範疇の組成を明らかにすることである。すなわち、フットに韻律語の主要部を担う範疇としての位置付けを施した上で、オノマトベの形態に主要部始端構造および主要部末端構造の二つの構造類型があることを述べる。そして、末端構造を持つオノマトベに生じる韻律計算の領域を、形態に共起する助詞「と」を含めた構造と認定することによって、オノマトベに現われるアクセントパターンが一般語種に見られるものと同様の無標性を示すことを論証する。

第二は、オノマトベの語形成を統御する韻律的な条件を明らかにすることである。オノマトベにおいては韻律構造の構築と形態の派生とが表裏一体の関係にある。すなわち、韻律構造の生成に関わる音韻的条件が、語形成を統御する傾向がある。このような韻律依存型の語形成は多くの言語において観察されるが、本論文は日本語オノマトベもその一員であることを明らかにする。そして、重複形・接辞形・強調形、三つのタイプの語形成プロセスがあることを指摘し、その適格性条件が音節およびモーラの構造によっていることを論じる。

本論文は、以下の 6 章からなる。

第 1 章「序論」では、オノマトベの音韻論的研究における本論文の位置付けを示すとともに、本論文での分析の枠組みについて論じる。位置付けについては、従来のオノマトベ研究が個々の分節音の發揮する音象徴的效果の探究に偏りがちだったことを指摘しつつ、韻律構造に着眼する本研究の意義について触れ、韻律構造の特徴を明らかにすることによって、多様な形態構造の中から形式的一般性を見出すことが可能であることを論じる。分析の枠組みについては、主要な韻律範疇と属性を顧みつつ、次の三点を主張する。そして、本論文の韻律分析は終

始一貫してこの三点に基づいて行われること、行いうることを述べる。①音節をその重さの違いによって類型化する音節量の理論が、日本語オノマトペの分析においても有効であること。②緩和階層仮説に基づくフット解析のアルゴリズムによって、韻律現象に現われる非対称なパターンがよく把握できること。③助詞を含む韻律語の構造が韻律計算の領域として位置付けられること。

第2章「韻律依存型語形成」では、オノマトペの語形成が韻律構造の構築と表裏一体の関係にあることを論じる。まず語幹について、音節数の異なる語幹の構造がすべて二項フット構造として一般化できることを証明する。次に、重複形オノマトペについて、その語形成過程にS重複とP重複の二つの対極的な類型があることを、韻律構造中の主要部フットの位置の観察を通して明らかにする。また、部分重複形の形成に関与する適格性条件が韻律的な尺度によって規定できることを述べつつ、重複子の音節数が基体の音節数と同等である場合に限り適格な語形成が起こることを論証する。続いて、接辞形オノマトペの韻律構造を分析し、語形成に伴ってアクセント移動が起こること、及び、韻律的な主要部が形態の右端に生じることから、このタイプのオノマトペがP重複形と深い類縁性を示すものであることを明らかにし、接辞形とP重複形の語形成上の関係を語彙音韻論的な含意のもとで把握する。最後に、強調形オノマトペの構造をめぐり、モーラ(μ)を強調辞の実体として位置付けた上で、強調辞の位置及びその分節上の実現のあり方を通して、接辞強調形と重複強調形の構造上の違いを論証する。

第3章「四拍性と韻律鋳型」では、4割以上のオノマトペが4モーラのもので占められている事実に基づき、4モーラの大きさがオノマトペの語形成にとって意味あるサイズとして機能しているとの予測を立て、4つのモーラ節点を含む韻律鋳型を充足することが、語形成の適格性を査定する条件として課されているとする韻律形態論的なモデル(韻律鋳型)を提案し、その妥当性を検証する。その過程で、本論文では次の二点を本論独自の分析として提示する。①韻律鋳型内のモーラ節点を満たす要素には、オノマトペ本体だけでなく、これと共に起る助詞「と」も含まれる(助詞の韻律化)。オノマトペの中には、助詞を義務的に伴うグループとそうでないグループがあり、両者は語のモーラ数に応じた非対称な分布をなしている。オノマトペ本体が4モーラに満たない語では助詞が義務的に必要とされる一方で、オノマトペ本体が4モーラの大きさをなしている場合には助詞が恣意的な振る舞いを見せる。助詞の韻律化はこの非対称性に基づいて提案される仕組みであり、4モーラに満たないオノマトペでは韻律鋳型を充足するために助詞が義務的に鋳型内に編入される。②接辞型オノマトペの末尾に現れる促音は、音節構造の再編成によってもたらされる韻律的な接尾辞である。なお、「グイッと」「ザーッと」など超重音節を形成するオノマトペがあるが、それは促音が韻律鋳型を充足するための調整要素として機能している。

第4章「アクセントと韻律構造」ではオノマトペに起こる多様な形態のバリエーションが、アクセント構造に基づいて大別すると二つの類型に整理できることを論じる。すなわち、そのいずれの類型においても、韻律制約「非末端性」を満たす形でアクセントが生成されていることを明らかにする。その二つの類型とは、「ピ(カピカ)」のように語頭音節にアクセント核を持つ主要部始端型の構造と、「ピカピカ(ッ)」のように語末音節に核を含む主要部末端型の構造とである。この内、後者のアクセントは日本語全般の韻律構造から見ると有標な性格を有している。それは、一般語種の複合語ならびに外来語のアクセント生成過程では、核の生成位置として語末音節・語末フットを避ける性質(非末端型)が見られるが、「ピカピカ(ッ)」などの末端型のオノマトペではこれらの位置において当該語のアクセントが生成されているからである。一方、末端型オノマトペが常に助詞「と」を義務的に伴う点に注目して、この助詞が韻律化された構造(以下「韻律化構造」)がアクセント生成の領域として機能していると考えることにより、オノマトペにおいても非末端性制約に基づくアクセント生成が生じている様子が明らかになることを述べる。

第5章「強調語形成と音韻構造の有標性」では、重複強調形は辞典類に立項されにくい形態であるため、本論文では約100名の大学生を対象とする調査を行って語形成の実態を把握し、次の3点を論証する。①音節構造：形態の左端の重音節を作り出す位置に強調辞が挿入されやすい。②分節構造：有声重子音を作り出す位置には強調辞が入りにくい。③モーラ構造：重複形の後部要素のモーラ数が前部要素のモーラ数と同等ないしはそれなり少

なくなる場合にのみ適格な強調形が作り出される。この内、③は絶対的な適格性条件として働くが、残りの①②は語幹の分節音の組成による相対的な関係を見せる。本論文では、この事実に立って、A群：語幹の子音が全て無音声である構造（「ピカピカ」など）、B群：語幹の子音が全て有声音である構造（「ダブダブ」など）、C群：第1子音が有声音である構造（「ベタベタ」など）、D群：第2子音が有声音である構造（「スベスベ」など）の4つの音配列を取り上げ、①および②の条件の働き方を検証する。すなわち、A・B・C群では、①②のどちらの条件に従ってもHL-LL型（「ピッカピカ」など）は出力されやすいが、D群だけは特異な振る舞いを見せる、つまりLH-LL型（「スベスベ」など）が現れやすいことを踏まえて、二つの条件の間に深刻性の違いがあることを指摘し、分節構造の有標性条件の方が音節構造の有標性条件よりも強調辞の位置決定をめぐって支配的な役割を担っていることを明らかにする。

第6章「結論」では、本論文で試みた分析に基づいて日本語オノマトペにおける語形成と韻律構造の相関性を総括するとともに、韻律的側面におけるオノマトペと一般語種の交渉に言及しつつ、今後の研究の課題と方向を示す。

審 査 の 結 果 の 要 旨

日本語オノマトペの音韻論的研究にあつては、従来、構造主義的な音象徴論が主流を占めてきた。音象徴論はそれなりの成果をもたらしたが、反面、音節ないしモーラ単位の平板かつ静的な意味的分析に終始せざるをえなかった。そのため、オノマトペの語形成や韻律構造などを立体的かつ総合的に説明するには至らなかった。

本論文は、このような状況を踏まえて、韻律形態論の枠組みによりつつ日本語オノマトペの語形成と韻律構造との関係を解明しようとする意欲的な研究である。すなわち、日本語オノマトペについて、その語形成は韻律構造と表裏一体の関係にあること、その生産は2つの韻律形態論的なモデル（韻律鋳型）によって支配されていること、アクセント構造に基づく二つの類型があること、そして、強調形の場合強調辞の挿入される位置は音節構造と分節構造の有標性によって決定されることなどを述べる。

いずれの主張も、丹念なデータの收拾と緻密な分析に基づいており説得力に富んでいる。そして、この分野の研究に新しい知見をもたらすと同時に、新しい研究領域を提示している。この点において本論文は高く評価される。ちなみに、韻律構造上一般語彙もオノマトペと同様に取り扱える可能性を指摘しているが、これもまた日本語語彙形成の原理を解明する糸口を示唆するものとして注目に値する。なお、韻律化における助詞「と」の取り扱い方や最適性理論との関連について若干問題が残されているが、もとよりそれは日本語オノマトペ研究史における本論文の価値を損なうものではない。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。